

110 学年度第一学期 Eurasia 基金会国際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」系列講次(4)

講題：近代東アジア史脈における台日関係

中国文化大学 110 学年度 Eurasia 基金会国際講座第 4 回は、台湾史および日本近代史研究の著名な学者で、国立台北教育大学台湾文化研究所所長何義麟教授を招いた。何教授は一人の日文系学生から台湾史研究者になるまでの 40 年におよぶ自身の歴史を語り、また台湾研究の書籍を用いて今回の主題「近代東アジア史脈における台日関係」を講じた。

最初に、何教授は 1979 年に日本研究の書物“*Japan as Number One*”が出て、世間の注目を集めたことに触れた。この年は台湾が日本への観光ビザを発給した年でもある。それまで台湾国民は簡単に出国できなかった。その後、1980 年代に台湾社会は転換期に入り、経済が発展し、政治方面でも党外運動および民主化が進んだ。こうして社会が開放的になったことで、台湾を主体とする研究が次第に目覚めてきた。

台湾人的日本時代

戒厳令時代に台湾史は教科書に記載されなかったため、国民が自己の歴史を知らないという社会が形成された。近年はカリキュラムの微調整により、台湾史は小中高の授業に採用され、記憶の中に隠されていた (invisible) 台湾の歴史が目に見えて現われた (visible)。このようなプロセスに直面し、何教授はこれは台湾史に対する記憶の一種の解凍であり、こうした解凍作業こそ台湾史研究者としての使命だと語る。2009 年に台湾大学から出た『台日関係史』は学界で初めて「台日関係」を分析対象とし、分野を越えて、台湾を認識するための手がかりとなる有益な専門書である。2019 年に何教授は『台湾人的日本時代』を著わし、日本の植民統治期を馬政権時代は「日據時期」と呼ばねばならず、韓国では「日帝時期」と呼ばれると記す。何教授はこの時期を「日本時代」と定義する。そして歴史は決してたんなる過去の出来事ではなく、歴史を取り戻す叙述であり、持続的に行う論争だと述べる。

日華関係から日台関係へ

何教授は自身の成長期には台日関係がなく、日華関係しかなかったという。台湾と日本の関係は台湾を主体とした台日関係に存在せず、ずっと中華民国を前提とした日華関係が語られてきた。しかし、このような関係は 90 年代に入り

変わってきた。

1992年に若林正文教授が出した『台湾—分裂国家と民主化』は多くの台湾人の心を揺さぶった。作者は台湾を東アジア国家と社会の系列に入れて論じ、日本人学者の目から見た、台湾近代民主化の紆余曲折を明快に描き出してくれた。1998年に日本の学术界に「日本台湾学会」が成立し、会報を発行した。学会の成立は日本と台湾の関係が旧来の日華関係を脱して、台湾を主体とする段階に入ったことを象徴的に示している。2008年には若林教授は『台湾の政治—中華民国台湾化の戦後史』を上梓した。この書の副題「中華民国台湾化」はまさに戦後台湾の変化を最もよく捉えていると何教授は述べる。中華民国がすでに台湾化した以上、台湾と日本関係も日華から日台関係へと変わるのは自然である。

台湾史研究の心得の共有

往古の台湾は無主の地だった。1624年にオランダが台湾を統治すると、台湾は世界史の舞台に上った。江戸時代の日本は台湾島を「高砂国」と呼んだ。大航海時代に西欧人が台湾へやって来た当時、台湾島にはオランダ人、日本人、漢人、原住民などがいた。1867年のローバー号事件、1874年の牡丹社事件は台湾史を変えた重要な転換点だった。台湾は多くの外来政権の統治を経ており、外来移民が絶えず現れる社会、多種の文化衝突と融合を経験した社会である。台湾史を通して日本を認識し、世界史の発展の流れを認識する必要がある。近代東アジア史と世界史の脈絡の中で、百年以上にわたる台日関係史を振り返ることで、われわれは台湾がたどってきた道程を明確に知ることができ、それにより台湾が未来にいかに関係すべきかがはっきりわかるだろう。

(Web サイト: <https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>)

(撰稿: 涂玉盞・日文系副教授)

(日本語訳: 塚本善也・日文系副教授)